

エピソード77

スマホに夢中で注意しても止めず、
お母さんが疲弊しています



このエピソードでは、教職
経験25年目の40歳代女性
の先生の経験を紹介します。

なみちゃん

小学校教師として25年以上の経験
があります。



先生は、特別支援教育コーディネーターをされているんですね。

6年生の真鈴さんは、夏ごろから遅刻、欠席が増えてきました。登校してもいつも眠そうです。お母さんは一人で子育てをしています。ある日、お母さんからコーディネーターの私に相談がありました。

夜になると、スマホに夢中になり、寝るのが遅くなってしまい、朝起きられず遅刻や欠席が多いこと、スマホをやめて寝るよう注意してもやめず、最後にはお母さんが怒鳴って真鈴さんが癇癢を起こす、の繰り返しで疲弊しているとのことでした。

さまざまな相談窓口にも相談に行きましたが、どこへ行っても「スマホの使用制限をかけたほうがよい」と言われるばかりでした。

コーディネーターに相談に来たお母さんは、「学校に行ってもらうために、スマホを取り上げた方がよいのでしょうか？取り上げると暴れて近所迷惑になるため、強く言えないのです。私が悪いのでしょうか。」「ネットで調べたら真鈴はADHDのようなので診断を受けたい」と泣きながら話します。

コーディネーターはお母さんの話を聞いて、医療機関に相談することを勧めるとともに、これまでお母さんができる限りの対応を行ってきたことをねぎらい、周囲に理解されないつらさを受け止めました。

コーディネーターは、真鈴さんの特性、学校生活・家庭生活の状況などを総合的に見直していく必要があるのではないかと考え、お母さんと一緒に確認していくことにしました。

こだわりの強い真鈴さんは学校生活に強いストレスを感じており、友達とも折り合いが悪いこと、また、お母さんの帰宅が遅く、夕食の時間がとても遅いことが分かりました。そのため、お母さんは仕事のシフトを変更し、早く帰宅できるように調整しました。医療機関ではADHDの診断が出て投薬の力を借りることにしました。

学校は思い切って毎日3時間目から登校すると決めてしまうことで、朝、お母さんが穏やかな気持ちでAさんに対応できるようになり、真鈴さんも穏やかに登校できるようになりました。

夜の過ごし方については、真鈴さんとお母さんとコーディネーターの3者で相談しながら計画を立て、実践し、記録し、週1回振り返りの時間を設けることにしました。週1回のふりかえりの時以外は、お母さんは極力口出しせず真鈴さんの自主性に任せることで、真鈴さんが自分自身の生活に課題意識をもち、徐々に自己コントロールできるようになりました。

お母さんは「コーディネーターの先生が、真鈴や家庭内の状況を総合的に理解してくれたため、私が落ち着いて真鈴と向き合えるようになりました。私が穏やかになると真鈴も穏やかになっていったので、親子って影響し合っているのですね。」と話しました。



なみちゃんの一言

- 特別支援教育コーディネーターは母子だけでは煮詰まってしまう状況に介入し、両者の頑張りやつらさを汲み取り、共感し、通訳のように伝えてあげることで、絡まった糸をほぐすお手伝いができるのかもしれない。

お・し・ま・い



なみちゃん

ナレーション 浪岡美保
(北海道教育大学大学院 修了生)

イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)